

## 新学習指導要領の下での音声指導

相 原 和 恵

### 1. 序 論

2002年度より中学校において完全学校週5日制に対応した新学習指導要領が実施に移されている。今回の外国語科の主な改訂内容としては、教育課程上の位置付けが必修教科となること、原則として英語が履修されること、目標が実践的コミュニケーションの育成に一本化されること、弾力的な指導ができるように学年ごとの指定が廃止されること、学習内容が削減されることなどが上げられるだろう。興味深いのは、学習内容が整理・軽減された中で、音声に関する指導事項が増えたことである。これは音声によるコミュニケーション能力の育成に重点が置かれたことを反映している。本論は、今回新たに加えられた音声に関する指導事項である「発音表記」と「語と語の連結による音変化」を取り上げる。

まず、新学習指導要領（2004）におけるこの2つの指導事項の取り扱いについてであるが、「発音表記」については、「指導計画の作成と内容の取扱い」の項目エに「音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできる」と記されている。表記方法や学年に指定はないが、音声指導時の補助的手段として学習者の負担にならない程度に使用できることが示されている。「語と語の連結による音変化」は、「言語材料」の音声の項目に「句の基本的な強勢」とともに新しく加えられた。もっともこれらの指導事項は今までの英語の授業で全く取り扱われなかったわけではなく、2002年度以前のテキストにもこれらに関する記述は見られる。例えば *Sunshine English Course* (1999) では、新出語句に発音記号が付記されており、“Miniboard”や“Clipboard”のコーナーでは発音記号を用いて英語の音が説明されている。また、語と語の連結による音変化に関しては、18箇所の記述を見つけることができる。今回あえてこれらの指導事項が学習指導要領に明示されたことは、実際に聞いたり話したりする音声によるコミュニケーション能力の育成が、今まで以上に期待されていることを意味するといえるだろう。

新学習指導要領が実施に移されて3年の月日が経とうとしているが、この2つの指導事項の導入状況は未だ満足できるものとはいえない。特に発音表記に関しては、研究の余地が残されているといってよいだろう。その原因のひとつとして、発音表記を学習することが学習者にとって新たな負担となることが上げられる。相原は2003年5月に茨城県水戸市の公立中学校で発音表記（発音記号と口腔図）を使用した音声指導の実践研究を行ったが（相原・Rosser 2004）、同校の日本人英語教師は発音記号を学習させることが学習者の負担になると考え、その導入に難色を示している。2つ目の原因としては、発音表記を使って指導することの難しさが上げられる。2003年度に相原が国立大学教員養成コースで担当した英語科教育に関する授業の受講生は「自分が発音記号を読めないので、それを使って指導することに不安や抵抗がある」と述べている。

以上のような状況を踏まえ、本論では「発音表記」や「語と語の連結による音変化」を効果的に取り入れた音声指導のあり方を考察する。第2節では、この2つの指導事項を中学校の英語の授業に導入することの意義を示し、第3節では、アンケート調査結果から大学生が経験した音声指導の状況を示すとともに、彼らがこの2つの指導事項の導入をどのようにとらえているかを明らかにする。第4節では、相原が2004年度に茨城キリスト教大学で担当した「教職総合演習」において学生が行なったマイクロ・ティーチング（以下MT）を記述し、第5節では、それらの授業の分析に基づいて望ましい音声指導のあり方を明らかにしていく。

## 2. 新指導事項の導入の意義

### 2.1 「発音表記」の導入

瀬沼（1999：125）は、中学校学習指導要領の発音表記についての記述「必要に応じて発音表記を用いて指導することもできる」は、発音表記を利用した方がしない時より効率的でしかも効果的な場合に、それを用いて指導することができることを意味すると解釈している。相原・Rosser（2004）は、発音表記を利用した方がしない時より効率的且つ効果的な例として次の3つを上げ、「発音表記」を導入することの有効性を示している。

#### ①英語の個々の音を概念化することができる

日本語と英語は音声的にかなり性質を異にする。日本人が日本語の音声体系をほぼ習得した後に英語を学習し始める場合、英語の音を日本語の音声体系に当てはめながら学習すると予想される。その結果、“base”と“vase”，“sink”と“think”，“lock”と“rock”，“hot”と“hat”などの区別は彼らにとって難しいものとなる。これらの音の違いは音素的な違いであるため、音声指導が必要である。

未知の音を習得させる場合には、ただ漠然と似た音を作り出させるだけでは不十分である。その方法では常に正しい音を作り出せるという保証はなく、作り出した音が正しい音であると判断してくれる人がいつもいるとは限らない。学習者自身が目標音を概念化し、他の音と区別できる能力を持つ必要がある。口腔図で調音器官の動きを読み取ることができれば、目標音を他の音と区別することができる。発音記号を読むことができれば、未習語の発音を知ることができる。つまり、発音表記を使うことによって、学習者は目標音を概念化することができ、効率的にその音を習得することができる。

#### ②英語の語の発音を正しく具現化することができる

日本語と英語は音節構造も異なる。開音節構造を持つ語が多い日本語とは異なり、英語には閉音節構造を持つものが多い。この違いが、日本人英語学習者にとって、英語の子音連続の発音を難しいものにしている。これは①で上げた例とは異なり弁別的なものではないが、その発音はネイティブ・スピーカーにとっては明らかに不自然なものであり、より自然な英語の発話実現のためには音声指導が必要である。

子音連続を正しく発音させるためには、介入母音の存在に気づかせる必要がある。日本人の多くは、ネイティブ・スピーカーと自分の英語の発音を聞き比べただけでは介入母音

の存在に気づかないが、両方の発音を発音記号で表記し対比させれば、その違いは一目瞭然である。発音表記を利用することによって問題箇所を具体的に示すことができ、学習者は英語の語の発音を正しく具現化することができる。

### ③学習者の主体的な学習への道を開くことができる

日本語の綴り（文字連続）と発音はほぼ一対一で対応しているが、英語はそうではない。そのため、綴りから英語の発音を、あるいは発音から綴りを予想することは、日本人英語学習者には難しい。文字で表されている語の意味は辞書から知ることができるが、音で表されている語の意味は発音記号が読めなければ確定することができない。学校を離れて英語を学び続ける時などは、指導者やテープ、CDなどの音声モデルがいつもあるとは限らないため、自学自習は難しくなり、学習者の主体的な学習への道が閉ざされる可能性がある。しかし、学習者が発音表記を正しく利用できれば自学自習は可能になる。口腔図を使って調音器官の動きを読み取ることができれば、未知の音の調音について知ることができる。発音記号が読めれば、未知の語の発音を知ることができる。つまり、発音表記が学習の橋渡しとなり、学習者は主体的に英語の学習を続けることができる。

## 2.2 「語と語の連結による音変化」の導入

日常日本人が日本語を話す時、単語を一語一語切り離して発音しないが、英語の場合も同様である。“What did you buy in the market?”の“did you”は、“did”の語末の/d/と“you”の語頭の/j/を連結させるのが自然であるし、“I bought an apple.”の“an apple”は、“an”の語末の/n/と“apple”の語頭の/æ/がリエゾンして発音されるのが自然である。このように語と語を連結させることによって、話者は英語をなめらかに且つリズムカルに話すことができるが、相原（2003）も示すように、英語学習者にとってこの音の連結が英語の聞き取りを難しくしていることも事実である。

Gimson（1980:297）は、これらの音変化の知識はそれを使用するか否かにかかわらず、英語学習者にとって必要であると述べている。その知識がなければ、その人の話す英語はネイティブ・スピーカーにとって不自然なものになり、口語体の英語を理解することも難しくなる。相原（2002）は語と語の連結による音変化を子音に焦点を当てて記述しているが、この種の情報は学習者の助けとなるだろう。以上のことから、実践的コミュニケーション能力の育成に重点が置かれた中学校の外国語科に「語と語の連結による音変化」を導入することは十分に意義のあることだといえる。

## 3. 音声指導の状況と大学生の意識

ここでは、学生を対象としたアンケート調査結果から、彼らが過去に受けてきた音声指導の実際を明らかにする。彼らが中学校などで英語の授業を行う場合、彼らが受けてきた英語の授業が大きな影響を与えることは容易に予想できる。調査対象は2004年度に相原が茨城キリスト教大学で担当した「教職総合演習」の受講生28名である。

まず「発音表記」についてであるが、彼らが発音表記を使った音声指導を受けた経験の有無を図1に示す。約8割の学生が「ある」と答えており、その時期は、中学校が36%、

高等学校と大学がそれぞれ50%であった(複数回答)。指導者が使用した発音表記は発音記号(86%)と口腔図(41%)がほとんどで、少数ではあるがカナ表記も上げられている。発音表記を使用した音声指導の難易度を図2に示す(「5」が難易度が大きい)。

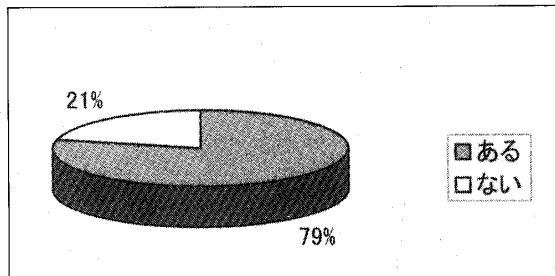


図1 発音表記を使った音声指導の経験の有無

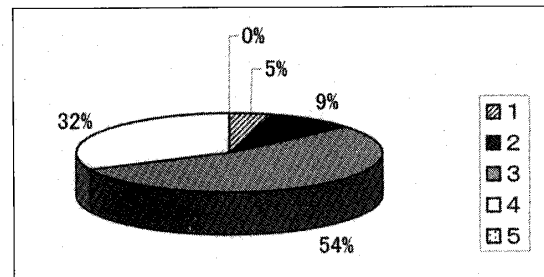


図2 発音表記を使った音声指導の難易度

図3は、発音表記を使った音声指導を行うことに対する彼らの意欲を示している。89%の学生が発音表記を使って音声指導を行いたいと「とても思う」または「思う」と答えている。その理由は次のとおりである。

- ・耳で英語の発音を覚えるのも大切だが目で理解することも大切だと思う。
- ・カタカナやひらがなだけでは英語の発音を説明するのが難しい。
- ・発音表記を使うことで生徒は今までよりも発音に気をつけるようになると思う。
- ・英語の微妙な発音を説明する時に発音表記は便利である。
- ・発音記号が読めないと辞書を読む時苦労する。
- ・覚えるまでは大変だが覚えてしまえば生徒は自学自習ができるようになる。

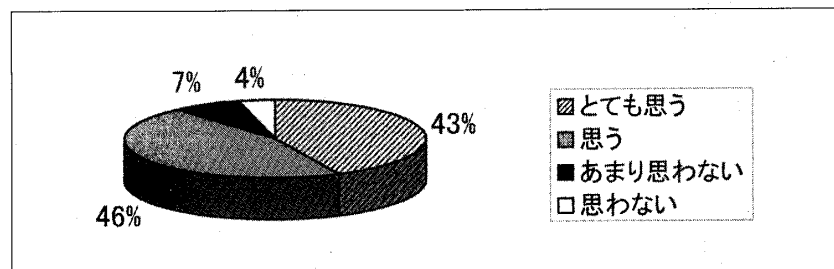


図3 発音表記を使った音声指導に対する意欲の程度

しかし、11%の学生は発音表記を使った音声指導を行うことに消極的である。その理由は次のとおりである。

- ・発音記号を覚えさせるのは時間がかかる。
- ・自分が発音記号を読めないので指導するのが難しい。
- ・口腔図を理解するのが難しいと思う。
- ・発音表記を使って音声指導をするということはそれだけ厳密に発音を教えなければならないことになるが、自分がそれだけきちんと発音できる自信がない。

- ・覚えることが増えるのはかわいそう。

発音表記を使って音声指導を行うことに積極的な態度を示した学生も、次の点には不安を感じている。この記述内容は、上記の発音表記を使って音声指導を行うことに消極的な学生の理由とほぼ同じであることから、共通の課題であるといえるだろう。

- ・アルファベットにない記号を教えるのが難しい。
- ・綴りと発音記号を混同してしまいそうで不安である。
- ・指導者である自分が正しく発音できなければならない。
- ・口腔図を使っての説明のしかたが難しい。
- ・発音記号を覚えさせるのに時間がかかる。
- ・それぞれの音についての的確な説明ができるか不安である。

次に、彼らが「語と語の連結による音変化」の指導を受けた経験の有無を図4に示す。「ある」と答えた学生は68%であり、その時期は、中学校58%、高等学校53%、大学26%であった。この指導の難易度を図5に示す。約9割の学生が「1（やさしい）」、「2（やややさしい）」、「3（ふつう）」いずれかに評価している。

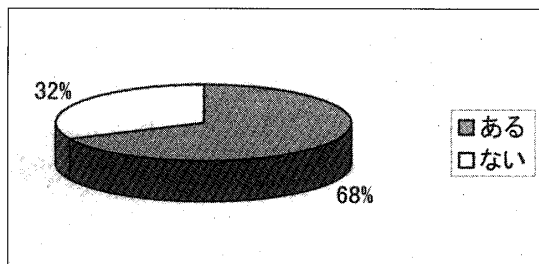


図4 音変化の指導を受けた経験の有無

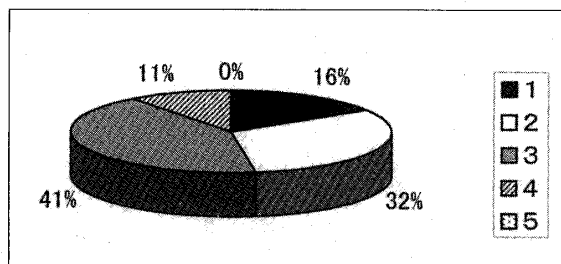


図5 音変化の指導の難易度

図6は、「語と語の連結による音変化」の指導を行うことに対する彼らの意欲を示している。彼らは次の点に不安を感じてはいるものの、96%がその指導を行うことに対して積極的な態度を示している。

- ・説明のしかたが難しい。
- ・わかりやすく指導するためには教材をうまく利用することが必要だと思った。
- ・「語と語の連結による音変化」への注目のさせかたが難しい。
- ・指導者である自分が語と語を連結させて読めるか（話せるか）不安である。
- ・単語ひとつひとつの発音がおろそかになりそうで不安である。
- ・語と語の連結による音変化の使用は個人差があるため、どこまで教えればよいのかわからない。

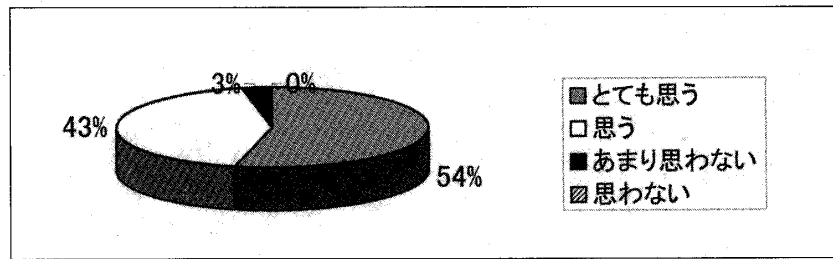


図6 語と語の連結による音変化の指導に対する意欲の程度

以上の結果から、「発音表記」や「語と語の連結による音変化」を授業に効果的に取り入れるためには、これらの音声に関する知識とそれらを使った指導方法が十分に教育される必要があることが分かる。「教職総合演習」は英語の教員免許状取得を希望する学生を対象としていることから、その好機であるといえる。前者については、本授業の予定時間数と英語音声学などの授業でそれらの指導を受ける可能性があることを考慮して簡単に扱うこととし、後者に重点を置くこととした。

#### 4. 「教職総合演習」の授業内容

本授業は茨城キリスト教大学文学部の教員免許状（英語）取得を希望する2年生を対象としたもので、中学校で実際に英語の授業を展開する時に必要となる知識と技術を身に付けることを到達目標としている。新学習指導要領の下で中学校における英語科教育がどのように変わるべきかを理解し、その理解の上に立って、改訂内容やその指導についてのレポート作成、プレゼンテーション、MTなどを行う。

「発音表記」と「語と語の連結による音変化」に関する授業は、7時間取り扱いで実施した。まず事前指導として、この2つの指導事項の基本的知識の概説、教授用資料の提示、指導例の紹介、指導事項の分担を行った。それぞれの指導内容は次のとおりである。

##### 「発音表記」を使用した音声指導

題材：Unit 1 “Hiking with Ms. Green” (*New Horizon English Course 2*)

指導内容：新出語句の指導 (p. 7)

Unit 1 の新出語句 fun, cookie(s), little, tired, again, next, pretty, a little の発音指導に発音記号を使用する。

指導時間：10 分

##### 「語と語の連結による音変化」の指導

題材：Unit 1 “Hiking with Ms. Green” (*New Horizon English Course 2*)

指導内容：本文の音読指導 (p. 7)

Unit 1 の本文はハイキングに参加した生徒の感想で構成されている。その音読指導に語と語の連結による音変化の情報を使用する。

Yumi: I had a good time. It was a lot of fun.

Mark: Thank you for the cookies, Ms. Green.

Koji: Mark looked really happy at lunch.

Keiko: It was a little tired, but I enjoyed the volleyball game.

Mika: Can we play volleyball with you again?

Naoki: Let's go to Lake Hiro next time. We can see a pretty view there.

指導時間：10 分

学生による MT は 5 時間取り扱いで実施した。MT 発表者以外の学生は、生徒として授業に参加するとともに、それぞれの MT を共通の基準で評価する。評価基準は、指導態度 3 ポイント、指導内容 4 ポイント、資料の活用 3 ポイント、計 10 ポイントである。指導態度とは声量・言葉使い・生徒とのインタラクションを、指導内容とは指導時間・指導の量・指導方法を、資料の活用とは学生が使用する教材または板書をさしている。これら 3 項目の評価と簡単なコメントを記入して発表者に提出する。この評価を通して、発表者は自分の MT を反省する材料を増やすことができ、発表者以外の学生は自分が MT をする時の参考にすることができる。

## 5. 考 察

本節では、「教職総合演習」の受講者が行った「発音表記」や「語と語の連結による音変化」を利用した音声指導の MT を分析し、新学習指導要領の下での望ましい音声指導のあり方を示していく。

### 5.1 学生 G の MT から（発音表記）

G は発音表記を使って Unit 1 の新出語句の指導を行った。使用した発音表記は、発音記号と唇全形図（ある音を発音する時の唇形を前景から描いた図）である。G は新出語句の母音に焦点を当てた音声指導を行っている。日本語の母音 [ア] に相当する英語の母音は [æ], [ɑ], [ə], [ʌ] など複数あり、日本人にとってはその区別が難しい。そこに注目した G の試みは母語の干渉を考慮に入れた音声指導の良い例といえる。

G はまず、フラッシュカードを使って新出語句の発音と意味を指導した。その後、日本語と英語の母音が大きく異なることを述べ、母音の音声指導へと導いた。

G は英語の母音について説明する時に、唇全形図（写真 1）を使用した。日本語の母音（アイウエオ）ごとに色画用紙で分類されて描かれており、発音記号も付記されていて分かりやすい。唇全形図の裏にもマグネットシートが付いており、黒板での指導もできるように工夫が見られる。個々の母音の調音についての説明では多少苦勞しているようだった

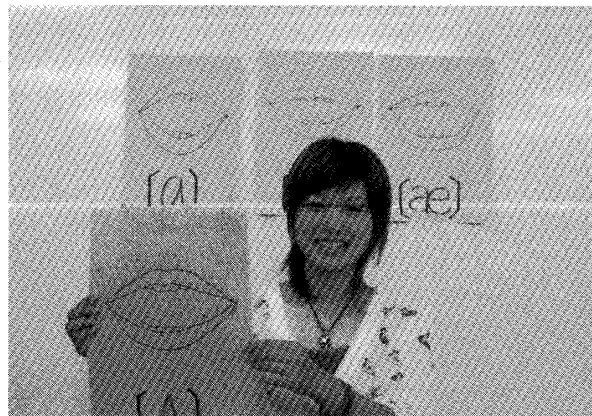


写真 1

が、唇全形図を併用することでそれを十分に補うことができた。

Gは学習者に発音記号を学習する理由として、音声モデルがなくても未習語の発音を知ることができることを知らせている。多くの中学生は何をするにもその理由や利点を知りたがる傾向があるが、この試みは彼らの学習の動機付けを刺激する意味で有効である。

## 5.2 学生KのMTから（発音表記）

Kは発音記号と口腔図を使ってUnit1の新出語句指導を行った。5.1に示したGとは対照的に、“fun”の[f]、“pretty”の[r]、“little”の[l]などの子音に焦点を当てた音声指導を展開している。これらの音は、日本語にはない音であるため注意を要するものである。これらの音を正しく発音できるようになれば、学習者の英語の発音は一步ネイティブ・スピーカーの発音に近いものになるだろう。相原（1999）によれば、英語のどの能力を高めたいかという質問に対し、多くの中学生は「ネイティブ・スピーカーのような発音で話せるようになりたい」と答えており、Kの指導はまさに彼らの要望に応えるものである。

Kも5.1で取り上げたGと同様に、フラッシュカードを使って新出語句の指導をしている。中学校で使用されるフラッシュカードは、表に単語、裏に意味が表記されているものが多いが、Kのフラッシュカードには表に発音記号も付記されており、発音記号を随時指導に取り込むことができる。指導者は市販の教材ばかりに頼らず、時には自分の授業に合った教材を開発していくことが必要であろう。

Kは口腔図（写真2）を使って、[f]、[r]、[l]の調音方法を説明している。音声学の知識のない中学生に口頭のみで調音位置や調音様式を説明するのは難しい。母語である日本語の音と比較しながら指導するにしても、日本語を発音する時にその調音位置や調音様式を意識して発音する日本人は少ないだろう。新しい音を指導する場合には、口腔図などを利用する必要がある。相原・Rosser（2004）は、中学校の音声指導において、visual aidsを利用することが有効であることを示している。



写真2

## 5.3 学生HのMTから（発音表記）

Hは発音記号、カナ表記、口腔図を使ってUnit1の新出語句の指導を行った。カナ表記の利用については賛否両論があるが、島岡（2001）が主張するように、発音記号が読みこなせない学習者のためには、カタカナやひらがなの利用も有効であろう。島岡（2001：35-62）は、従来のカナ表記では英語の音素を十分に識別できないとして、島岡式近似カナ表記の活用を提案している。Hは茨城キリスト教大学で島岡教授の授業を受講しており、そこで得た島岡式カナ表記の知識をMTで活用している。



Hはまず、フラッシュカードを使って新出語句の発音と意味の指導を簡単に行った。次に、“fun”などいくつかの語句をピックアップして、詳しい発音指導を行っている。新出語句全てに同じ重きを置いて指導するのもよいが、いくつかターゲットを絞って指導することによって、更に学習効果は上がるだろう。

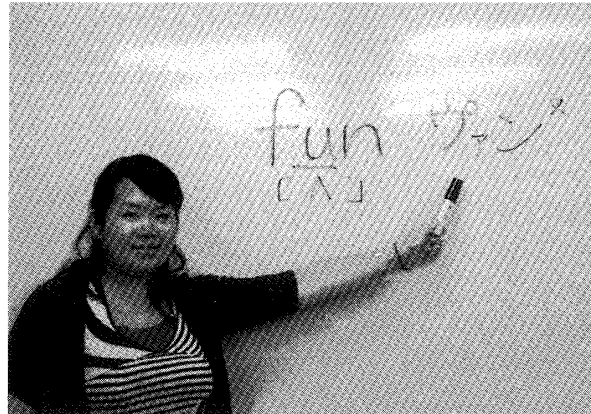


写真3

Hは発音指導の際に、発音記号と島岡式近似カナ表記を併用することによって(写真3)、より英語らしい発音を目指し

た音声指導を展開している。[f]を[フ]と表記しないことで、日本語の[フ]とは異なる音であることを生徒に効果的に伝えることができるだろう。また、[ʌ]の表記は[n]をより英語らしく発音させる時の助けとなるだろう。

板書に時間がかかり口腔図を十分に活用できなかったのは残念だったが、カナ表記を使って音声指導を展開する画期的な試みであったといえる。

#### 5.4 学生SのMTから(語と語の連結による音変化)

Sは「語と語の連結による音変化」の情報を使ってUnit1の本文の音読指導を行った。まず生徒に教師の後について本文を音読させ、その際気づいたことを発表させることで、語と語の連結による音変化の存在に注目させる方法を取っている。指導者が初めから全てを教えてしまうのではなく、時には学習者に気づかせる学習を取り入れることで、受け身ではない生徒を主体とした授業を展開することができる。今回は学習者が大学生であり、かつ指導内容を知っていたため、Sはすぐに「語と語が連結して音変化が生じている」という発言を引き出すことができたが、学習者が中学生の場合は指導者が適切な助言指導を与えなければ、この結論を引き出すことが難しいだろう。

Sは本文を書いたカードを黒板に張り、語の連結箇所を生徒に発表させ、それをカードに書き込み、それを使って連結箇所が生じている音変化の説明をした。この方法は、生徒に「自分の発表が取り上げられた」という成就感と自信を持たせることができ、生徒が主体的に取り組む授業を展開する上で有効である。

次にSは「上を向いて歩こう」のCDを使って、語の連結箇所を聞き取らせて、発展練習をさせた。注目させたのは“It's all because of you. I'm feelin' sad and blue.”の部分で、“sad”の/d/と“and”の/ə/が連結していることを確認した。身近にあるCDも教材になり得ることを学生に気づかせるMTであった。

#### 5.5 学生KのMTから(語と語の連結による音変化)

KはUnit1の本文中のYumiとKeikoのパートに焦点を当てて指導している。本文音読のCDを聞かせる際、語の連結箇所を探すように生徒に指示を出した。聞き取りのポイントを事前に示すことで、生徒の集中力が増し、学習の効果を上げることができる。

次に、K が語と語の連結による音変化に関する説明を行った。教授用資料には本文、連結箇所、音変化の様子、イラストなどが示されており、わかりやすく且つ楽しく学習できる工夫がされている。

Yumi の “I had a good time. It was a lot of fun.” の場合、“had” と “a”, “was” と “a”, “lot” と “of” が連結してリエゾンが生じる。また、“good” の /d/ と “time” の /t/ は両方とも歯茎閉鎖音であるため、前の音は息が開放されないために飲み込まれてしまって発音されないことが多い。Keiko の “It was a little tired, but I enjoyed the volleyball game.” の場合は、“was” と “a”, “but” と “I” が連結してリエゾンが生じる。K は発音記号を使ってこれらの説明を行った。“good” の無開放の /d/ に関しては、点線で表記するなどの工夫も見られた。

### 5.6 学生 T の MT から（語と語の連結による音変化）

T も Yumi と Keiko のパートに指導を限定して、「語と語の連結による音変化」を考慮に入れた音声指導を行っている。まず、何の情報も与えずに本文音読の CD を聞かせ、続いて生徒に音読させた。

次に、T が「語と語の連結による音変化」についての情報を生徒に与える。T は教授用資料として、本文のセンテンスカードを用意した。このカードは、“I”, “had”, “a”, “good”, “time” というように単語ごとに切り離されている。最初、T はそれぞれの間に少し隙間を開けながらカードを黒板に張っていった。次に、“had” と “a”, “good” と “time” のカードをくっつけた（写真 4）。生徒はこの操作を見ながら、音読をする時には “had” と “a”, “good” と “time” を連結させることを理解することができる。

T の視覚による説明は、言葉による説明よりも分かりやすい場合がある。語と語が連結することによってどのような音変化が生じているかについては、発音記号を使いながら口頭で説明を行った。T の MT は教授用資料を工夫することで、わかりやすく「語と語の連結による音変化」についての情報を提示した例といえる。

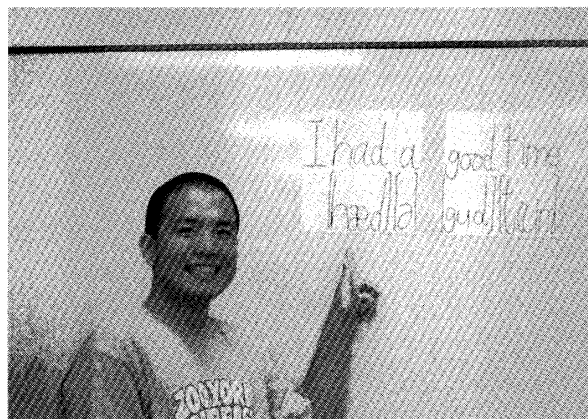


写真 4

### 5.7 学生の感想

英語教師を目指す彼らにとって、「発音表記」や「語と語の連結による音変化」を取り入れた音声指導のあり方が理解できたこと、指導者の立場に立って、音声学・音韻論的知識、英語の授業の展開法、音声指導のあり方を総合的に考えることができたこと、十分に計画され準備された授業は高い教育効果をもたらすことを実感できたことは、十分に意味があることだといえるだろう。以下、彼らの感想を紹介する。

- ・自分が中学生だった頃は語と語のつながりについてはいつの間にか自然と身についていたので、実際に自分が教える立場に立った時どうやったら分かりやすく伝えられるか難しかった。指導する側の大変さが分かった気がした。
- ・私自身が発音表記を使った授業を受けた覚えがなかったので、どんな風に授業をしたらいいか迷った。自分が教わる時にどのように教えてもらえばわかりやすいかを考え授業をやった。実際の授業は10分ではないので、先生は毎回大変だと思った。
- ・たった10分なのにとっても緊張した。時間が過ぎるにつれて楽しく感じたので、私は教えることが好きなのかもしれないと思った。
- ・実際の授業と同じことを経験できてとても良かったし、他の人のMTを見てとても参考になった。この経験を教育実習につなげていきたい。
- ・皆の前で話すということにとっても緊張してしまい、声が震えて言葉がうまく出ず、分かりやすさに欠けていたと感じた。また、どうしたら生徒に興味を持ってもらえる資料が作れるのか、いつ資料やCDを使うか、どのような流れで授業をするのかという点でかなり悩み大変だったが、いい経験になったと思う。
- ・自分で計画を立てて授業をするのは初めてだったので、スムーズに進められるか、どうしたら理解してもらえるか、ということが難しかった。授業を受ける側から指導する側に変わり、指導することは難しいと実感した。
- ・生徒に教えるということとは簡単なことではないと思った。でも生徒に教えることで、生徒も自分も学ぶことがたくさんあると思った。とても緊張して自分の考えていることの半分しか伝えることができなかったもので、次はもっとしっかり発音の練習をして重要なことを生徒に教えられるように頑張りたい。
- ・限られた時間の中で教えることがたくさんあると思った。少ない時間内でどれだけ内容の濃い授業ができるかは先生次第だと思うので頑張って工夫していきたい。
- ・今まで自分が教わったことのないことを説明するので難しかった。
- ・十人十色の教え方でそれぞれ楽しい授業だった。同じことを教えるのにも色々な方法があると思った。自分が教える立場になった時は皆の良いところを参考にしたい。
- ・人前で立って話すのも人に教えるのも苦手で、教壇に立ってかなり震えていた。資料作りはなかなか楽しかった。自分は発音が下手なので、だいた皆に助けられた感がある。他の人の授業は楽しいものもあり、素晴らしかった。勉強になった。
- ・資料作成や時間配分、授業内容を考えるのは大変だったが、作っている間は本当の先生になった気がして楽しかった。MTをすることで教師という職業をもっと良く考えるようになった。
- ・実際にMTをやってみて教えることの大変さを実感した。きちんと生徒に伝わっているかが気になった。人前でやるということとはなかなかないので良い経験になった。
- ・人の前に立って授業をしたことがなかったので緊張してしまい、言いたいことを全部言えなかったし要領も悪かった。授業を時間内に終わらせるのは難しいと思った。
- ・自分で授業を行い、また皆の授業を見て、とても楽しかった。このような授業をどんどん取り入れたい。
- ・初めてだったので緊張したが、分かりやすく楽しく教えるためにはどうしたらよいか

を考えて、自分なりに精一杯できた。自信にもつながった。良い体験ができた。

- ・授業内容を自分で考えてMTをやってみて大変だと感じた。こちらが一生懸命やれば生徒も楽しんでくれるのではないかと思った。来年の教育実習にむけてとても勉強になってよかった。
- ・自分の授業の理想図と比べて自分の技術があまりにも足りなかった。教育実習をするまでにもっと自分の発音を上達させたい。他の人の授業で自分では思いつかないたくさんアイディアを見せてもらえて良かった。参考になることが多かった。
- ・生徒は何が分かっているかがわからないかを知る必要があると思った。それが分からないとどこから説明したらよいか決められない。音声指導ということで自分の発音で教えていいのか不安だった。間違いを教えてしまったら生徒はそれを覚えてしまう。ALTの協力が必要だと思った。
- ・自分で授業をやってみて、また他の人の授業を見て、生徒を引き付けるような授業をするのは色々な工夫をしなければならないと思った。
- ・頭の中ではシミュレーションが出来ていたのだが、いざ教壇に立つとやはり緊張して口がまわらず焦ってしまった。人の前に立って何かを教えるという立場にあるからには堂々とした態度で臨めば良かったと思う。自分の身近にあるCDなども教材になることがわかった。
- ・今後自分が教育実習に行った時に役立てることができるのでよかったと思う。
- ・授業をやるということは大変難しい。自分がしっかり理解していないとならないので、何度も練習が必要だと思った。MTができて楽しかった。

## 5.8 より望ましい音声指導に向けて

より望ましい音声指導を展開していく上で必要なことは、音声指導のための教授用資料の研究が更に進められることであろう。相原・Rosser (2004) は、中学校の英語の授業で有効と思われる教授用資料をいくつか紹介している。

まず上げられるのは、日本語と英語の子音を調音位置と調音様式で分類した日英子音対照表である。英語には日本語には存在しない子音が存在するが、それらを習得させる時には、日本語の音で代用するのではなく、日本語の音を利用しながら正しい目標音を作りださせることが望ましい。多くの日本人が学校で英語を学習し始めるのは母語の音声体系をほぼ習得し終えた後であるから、むしろ日本語を活用すべきであろう。島岡 (2001) も、入門期の英語学習者が母語の音声体系を離れて学習するのは効果的ではないと述べている。日英子音対照表では、英語の子音が発音記号で、日本語のカタカナと一緒に示されているので、発音記号を導入したり、日本語の音の調音位置や調音様式を参考にしながら英語の音を作り出させたりする時に有効である。

日本語と英語の母音を舌の位置で分類した日英母音対照表も有効である。日英母音対照表では、英語の母音が発音記号で日本語のカタカナと一緒に示されているので、この表を使って発音記号の導入ができるとともに、日本語の音の舌の位置を参考にしながら英語の音を作り出させることができる。

発音記号ごとに分類された単語一覧表もあると便利である。ある音について指導する

時、指導者は目標音を含むいくつかの語を提示するが、中学校の英語の授業においては、提示する語は使用教科書からのものであることが望ましい。それぞれの音の単語一覧表があれば、音声指導に発展性を持たせることができる。

口腔図の利用も効果的である。多くの日本人は、日本語を発音する時でさえ、調音のしくみを意識していないため、英語の音の調音位置や調音様式、舌の位置などの説明は理解しにくい。口腔図はその理解の助けとなるだろう。但し、相原・Rosser (2004) が指摘するように、口腔図のように一見理解しやすいと思われる visual aids であっても、中学生にとってはその読み取りが難しい場合もあり、学習者に合わせた形に改良する必要がある。

もうひとつ研究の余地が残されているものに、発音記号導入のための教授用資料がある。発音記号を利用することで音声指導は効率的なものになるが、生徒の新たな負担となることが予想されるため、躊躇する指導者が多いのが現状である。学習者の能力や実態に合わせて発音記号が導入できる教授用資料が数多く開発されることを期待する。

## 6. 結 語

本論では、学習指導要領が改訂され、中学校の英語の授業の重点が音声によるコミュニケーション能力の育成に置かれることになったことを受けて、それに対応した音声指導を提示することを目的として、相原が茨城キリスト教大学で担当する「教職総合演習」の授業の考察と分析を行った。新しく指導内容として加わった「発音表記」と「語と語の連結による音変化」を取り上げ、それらを効果的に取り入れた音声指導に焦点を当てた。

第2節では、この2つの指導事項を中学校の英語の授業に導入することの意義を示した。第3節では、大学生が経験した音声指導の状況を示すとともに、彼らがこの2つの指導事項の導入をどのようにとらえているかを明らかにした。彼らの多くは過去において「発音表記」や「語と語の連結による音変化」を取り入れた音声指導を受けており、その必要性も認識しているのだが、実際にその指導をすることには不安を感じていた。その理由として、音声に関する知識と英語の授業を展開するための知識や技能が不足していることを上げている。そこで、この2つの指導事項のどちらかを利用した音声指導を彼らに考えさせ、模擬授業を行わせた。第4節ではその MT を記述し、第5節では、それらの授業の分析に基づいて、新学習指導要領の下での音声指導のあり方を示した。

今回は「発音表記」と「語と語の連結による音変化」を取り上げたが、新しいものは利用すれば効果的であるとは分かっているながらも、現場で活用されるまでには時間がかかるのが常である。今後も多くの英語教育関係者によって研究が進められ、より多くの英語の授業で新しい指導内容を積極的に利用した音声指導が行われることを期待する。

## 引用文献

- 相原和恵. 1999. 「先生のポケットはドラえもののポケット ver.2.1」『研究所報 25』(茨城県国民教育研究所), 273-305.
- . 2002. “New Phonetic Guidance for Japanese Junior High School Students” in *EPTA Biennial Papers* 3, 53-68. Hitachi: English Pronunciation and Transcription Association.
- . 2003. “Phonetic Changes in a Junior High School Textbook” in *Omika Studies in English Language and Literature* 7, 85-102. Hitachi: Graduate School of Ibaraki Christian University.
- 相原和恵・Rosser, C. 2004. 「発音表記の導入とその実践」『英語の発音と表記・第4号』(英語発音・表記学会), 30-42.
- Gimson, A. C. 1980. *An Introduction to the Pronunciation of English*. 3<sup>rd</sup> ed. London: Edward Arnold.
- 文部科学省. 2004. 『中学校学習指導要領』(文部科学省).
- 笹島準一他. 2002. *New Horizon English Courses* 2. (東京書籍).
- 瀬沼進一. 1999. 「指導計画の作成について」平田和人『中学校学習指導要領の展開』(明示図書), 119-128.
- 島岡丘他. 1999. *Sunshine English Courses* 1-3. (開隆堂).
- 島岡丘. 2001. 『中間言語の音声学』(小学館プロダクション).

Phonetic Guidance under the new *Course of Study*

Kazue Aihara

Under the new *Course of Study*, English classes in Japanese junior high schools focus on developing communicative competence. In order to develop this competence, more phonetic guidance should be introduced into English classes. The purpose of this paper is to show some examples of phonetic guidance. To begin with, we will show the effectiveness of using *hatsuon-hyoki* and the knowledge of phonetic changes which occur at word boundaries. Next, we will survey the students' experience of phonetic guidance by reviewing the results of a questionnaire taken in 2004 by the students of my class at Ibaraki Christian University. Then, we will consider the university students' own perceptions about phonetic guidance. Finally, we will observe examples of micro-teaching conducted by my students in an attempt to illustrate some ideal methods of phonetic guidance under the new *Course of Study*.